

大槌の「人」の魅力を発信する情報誌 ひよっこりひょうたん塾通信

# Tatsutto vol.3



撮影場所 小槌

発行日 2015年3月5日

発行 ひよっこりひょうたん島プロジェクト実行委員会、東京都、  
東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、  
特定非営利活動法人いわて連携復興センター、大槌町コミュニティ再生会議

web サイトでも、通信が見られます。

HP <http://www.hyotanjuku.jp/>

FB <https://www.facebook.com/hyoutanjyuku>

E-mail [hyotanjuku@gmail.com](mailto:hyotanjuku@gmail.com)



「金沢民」「地元民」になっ  
ていきたい

大勝院 副住職  
谷藤邦範さん

大勝院  
〒028-1133  
大槌町金沢 28-54  
0193-46-2004



他愛もない会話の中にもそっと何か気づかせてくれる、教えてくれる素敵なお人でした

## 任期を全うし、帰郷

高校を卒業し、京都の花園大学へ進学。卒業後も京都で修行をした谷藤さん。修行後、大勝院の副住職に就任するも、臨済宗妙心寺派本山に勤め、学生寮で指導員をしていました。

平成23年3月。新年度の準備をしていた時に、震災が起き、「帰ってきたいと思つたが、任期を全うしたいという気持ちもあつた」と迷つたまま、ボランティア緊急車両で大槌入りしました。少しずつ、ライフラインが復旧し始めたころ、「大槌にいてできることもあるだろうけど、京都に戻つて、もつと役立てる、動けることがあると思つた」と、戻ることを決意。

花園大学のボランティアは大槌町にも入り、谷藤さんを中心に、様々な活動を展開しました。そして、震災から1年後、任期を終え、大槌に戻ってきました。谷藤さんの毎日は、私たちが知っている「和尚さん」という仕事のほかに、お勤めやデスクワーク、研修会など出かけることも多いそうです。お父様である住職と、親子で切り盛りしています。

## 新しいことのはじまり

大槌に戻つた1年後、怜美さんとご結婚。怜美さんは、京都出身の漆職人。ご実家が、西陣織の帯の図案業をされていたことから、西陣織と漆を融合させた作品を手掛ける職人です。京都から、遠く離れた大槌へ嫁いでくる不安や迷いはあつたのではないかと思いましたが、「京都で漆の作業をしていた場所が、金沢に似ている。金沢の風土は、漆に適している」と話しています。

金沢の新年交賀会で、漆について講演を行った際、参加した方から、家に古い漆器があるが、手入れはどうしたらいいかなど聞かれるなど、怜美さんが嫁いできたことで、何か新しいことが始まるのではないかと感じていると、谷藤さんは話します。

「大槌で生まれ育つたけれど、大槌や金沢のことで知らないことが多い。周りの方々に教えてもらいながら、そして、古き良きものを大事にしながら、「金沢民」になつていきたい。やりたいことはいっぱいあります。今はここで生きることが始まつているので、地元民になつていきたい」と話します。

また、大勝院では、怜美さんも一緒に御詠歌に力を入れていくとのこと。別の県でのボランティア活動の中で、被災した方々が臨済宗のお経や御詠歌を聞き、手を合わせ、涙を流されたこともあつたそうです。そのことがきっかけとなり、「宗派をこえた祈りの取り組みをやつてみたい。その時に、御詠歌も大槌町でできたら」と話していました。

昨年末には、長男隆暉（りゅうき）君が誕生。現在は里帰り

中で、春には大槌に戻られるとのこと。

取材中、御詠歌を聞かせてくださった谷藤さん。心が安らぎ、また不思議と背筋が伸び、元気をもらつたような、そんな気持ちになりました。春には、怜美さんと隆暉君にも会えたらと思います。

これから、何か面白いことが始まりそうな、金沢。大槌の魅力のひとつになっていくのが、本当に楽しみです。

（文 一兜 育恵）



左：不思議と心が安らいだ谷藤さんのお茶  
右上：怜美さんが作った絡子環（らくすかん）  
右下：築122年の歴史ある本堂。



# 大槌の「三河屋さん」になりたい

内金崎自転車商会 内金崎大祐さん

内金崎自転車商会  
〒028- 1121  
大槌町小鎚第17地  
割わらびっこ商店街  
0193-42-2062



奏斗くと啓太くんを抱きながら、今後の展望を熱心に話して下さいました

**カフェを視野に入れた再建**  
 「震災前は、お店にお客さんが来るとお茶つこを飲んだりして、憩いの場になっていたと思います」

内金崎さんは震災後、小銃にあるわらびっこ商店街に店舗を構え、自転車の販売や修理を行っていました。また、震災前から配達サービスをしていた商店の人たちと一緒に、「ちよつとでも不便を便利に」と、配達料無料の買い物支援サービスも行っていました。

現在は、主に仮設の集会所を定期的に訪問し、自転車の修理を行っています。「どうやったらもつと気軽に無料点検に来ていただき、お客さんに喜んでもらえるか？」と考え、家族で話しあい、奥様の加代子さんが得意のお菓子づくりをいかし、またお母さんの陽子さんも大福餅作りが得意なことから、カフェ要素も含んだ無料点検として「チャリカフェをやっべし」と思い立ったのが始まりでした。チャリカフェは、お客さんがどのようなサービスを望んでいかを直接聞ける場でもあり、今後のご商売にも参考になるものがありそうです。

「店を再建したら、カフェも併設したい。それで、今はその宣伝を兼ねて開催しています」また、子どもたちが自転車で親しみながら安全に運転出来るよう、町内の幼稚園などで定期的に自転車の乗り方教室を開催しています。

チャリカフェやイベントには、双子の兄弟の奏斗くんと啓太くんを連れて行くこともあり、取材中も「内金崎自転車商会」のロゴマークが入ったお揃いのパーカーを着て、大祐さんの仕事に見入ったり、自転車で遊んだり、家族に見守られながらのびのびと楽しんでいる様子がうかがえました。

**笑顔あふれる憩いの一角を**  
 大祐さんと加代子さんは、震災前からお付き合いがあり、震災後に結婚、奏斗くと啓太くんが生まれました。天候の良い日は、町内を散歩しながら屋外で朝ご飯を家族で食べたり、主催するイベントなどにも家族で参加しています。

震災後、大槌にも支援物資などの様々なご支援をいただき、家財が流失した被災者には大変ありがたいものでした。一方で

ご商売を営む方々は、モノが売れないと商売にならないというジレンマを抱えている場面にも遭遇してきました。内金崎さんも、複雑な思いを抱えながらも、ご自分のやれることでお客様にコツコツとサービスを続けてきた方々の中の一人です。

「年配の方たちが暮らしやすく、子育てしやすい、まとまりのある住みやすいまちになって欲しい。店に来たお客様が、お茶したり子どもを遊ばせたりしたいですね。そして大槌の『三河屋さん』になりたい」と話す

内金崎さん。  
 お母さんの陽子さんは「砂鉄の釜があるので、それに大槌の湧水を入れて湧かしたお湯でお茶を淹れておもてなししたいと思っています」と笑顔を見せました。

復興工事が進む大槌の街角に、誠実なお客様への対応と、ご家族の笑顔あふれるおもてなしの一角が目の前に見えるかのような取材のひとつときでした。

(文 駒林 奈穂子)



左：丁寧に手入れされた工具  
 右上：加代子さん手づくりのガトーショコラ  
 右下：奏斗くと啓太くんをモチーフとした「チャリカフェ」の文字が入ったロゴ

「昔は、親たちが、あそこの家にこんな娘がいたが、おめさんの家さどうだべ？で話が決まったもんだ」

今回の表紙の撮影が行われた小鐘の石光男さん宅のご夫婦も、そのように親同士が決めたご縁で結ばれたと言います。

小石さんご夫婦が結婚したのは今から約60年前。当時は農閑期に結婚式を行ったため、雪山を徒歩で越えて来るお嫁さんもあったとか。

婚礼の3日前から、魚などの食材を用意し、お嫁さんが家に着く夕方から儀式を執り行ったと言います。

現在のように、大きな披露宴会場もなく、式は家で行われた時代。婚礼は、親戚、友人をそれぞれ毎日招き、3日ほど続けられたそうです。

写真は当時の婚礼を再現したもの。床柱を中心に、新郎新婦が座り、両側に仲人、もしくは「本家役」が座りました。

床の間には千歳の松、長寿遠く隔たつていても睦まじい夫婦といった『高砂』が描かれた掛け軸をかけ、左右に酒樽を置き、お嫁さんを迎え入れました。

この酒樽を置く習慣が今でも「酒立て」という結納前に新郎が新婦宅へご挨拶に行くという儀式として名残があるのかもしれない。

お互いの顔も知らずに結婚した方々もいた時代。(小石さんご夫婦は見知っていたそうですが)

長年丁寧に磨かれてきた盃の漆の艶が、少しずつお互いを知る楽しみがある、と教えてくれたような気がしました。



文 Coba ・写真 Hana Ozawa Ken'ichi Kikuchi



全国のTatsumitto。な取り組み

大槌MMプロジェクト

MMとはMatch Make II 縁をつなぐこと。岩手県大槌町の減少する人口問題を解決すべく、当事者である若者達が立ちあげた事業。縁を紡ぎ、大槌の魅力を再発見してほしい、この町をもっと好きになってほしい。それが願いです。



FB

<https://www.facebook.com/omnm.jp/?fret=ts>

omnm.jp/?fret=ts

あなたはこの小さな町で何かを好きになりましょう  
何かを好きになりましょう  
誰かを好きになりましょう

Tatsumitto。／たつととな人

立ちあがるうとしている人(立人)

思いを達成するために走り出している人(達人)

何かをしようと動きだし一生懸命な人(発人)

その汗が一筋の雫となり、平坦な水面に「たつと・」滴り、波紋広がっていく様子を思い浮かべます。

小さな思いは、1人より、2人とさらに共鳴し広がりや変化をもたらしてきます。時には心地よいハーモニーのように、時には波つこともあるかもしれません。そして、ゆっくりと地域に浸透していく様子を今回の通信に登場する人たちがより垣間見ることができました。彼らの変化を家族や友人、地域の人々が自然に見守り支えているのは「安心」という大きな器。このような多くの器をかりながら、希望や夢を育んでいるTatsumittoな人々のこれからが楽しみです。

事務局 元持幸子

※「たつと」＝大槌の方言 水滴を一滴垂らす 滴り落ちる様子を表す擬音語